

いきいき健康生活
鴻巣市広報「かがやき」 平成24年1月15日号 掲載
子宮頸がん（頸がん）ワクチン

近年、子宮頸がんの原因となるヒトパピローマウイルス（ＨＰＶ）に対するワクチンが接種可能となり、これにより頸がんを予防することが可能となりました。

ＨＰＶは性行為により感染し、ほとんどの女性が一生のうち一度は感染するウイルスです。健常な女性でも１０％以上の方にＨＰＶが検出され、特に若年者では高率（２０代では約３０％）に検出されます。

ＨＰＶは自分自身の免疫機構により排除され、３年以内に９０％が自然治癒しますが、一部の方では排除されずに感染が持続し、前がん病変である異型上皮に進展します。

ＨＰＶは遺伝子の型により約１００種類に分けられます。現在、ワクチンにはサーバリックス（ＨＰＶ１６型と１８型を予防）とガーダシル（加えて尖圭コンジローマを起こすＨＰＶ６型１１型まで予防）の２種類があり、どちらも６か月間に３回接種することにより２０年以上の予防効果が期待できます。

このＨＰＶ１６型と１８型の感染を予防すると、７０％の頸がんを予防できると予想されます。日本産婦人科医会は対象者として１１歳から１４歳を中心とする４５歳までの方を推奨しています。

これは、年齢別の性交経験率に関するいくつかの国内の調査では、中学３年生までは概ね１０％以下であるのに対し、高校生になると２０％以上に増加すると報告され、さらに特に初回性交後、短期間でＨＰＶに感染するリスクが高いため、性交経験者が増加する前の時期に接種をすることが理想的と考えられているからです。

また、すでに性交経験がある方でも、ＨＰＶ１６型・１８型に感染していなければ同じ位の予防効果が得られると考えられます。

現在日本では、年間８０００人が頸がん罹患し、２４００人が死亡しています。さらに他の先進国と異なり、日本だけ若い女性の死亡率が増加しています。

ワクチン接種により７０％の頸がんリスクを予防し、ワクチンで予防しきれなかった残りの３０％をがん検診で早期発見することにより、将来、子宮頸がんの死亡者をゼロにすることも夢ではないのです。